

## 文学における国際主義と民族主義

著者	小林 茂夫
雑誌名	日本文学誌要
巻	7
ページ	87-95
発行年	1961-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019045">http://hdl.handle.net/10114/00019045</a>

# 文学における国際主義と民族主義

小林 茂 夫

## 一 『種蒔く人』のころ

雑誌『種蒔く人』（大正一〇年二月創刊）の最大の業績は、わが国において最初の国際主義（インターナショナルイズム）の立場に立つ文学運動を展開したことであつた。当時の国際主義の文学運動であつた「クラルテ運動」をわが国においても展開しようと企てた小牧近江氏は、當時を回想して、次のようにのべている。

要するに「クラルテ」というのは、反戦運動のためのいわゆるレジスタンス、思想家のレジスタンスのことで、労働者や農民のインターナショナルのほかにその一翼として思想家や芸術家もインターナショナルをつくり、お互に手をつないで、絶対に戦争と闘おうじゃないか。《戦争と戦争する》世界的な運動を起そうじゃないかという思想家や、作家や芸術家の国境を越えた運動なのです。だが、日本とのつながりがまだなかった。（『種蒔く人』のころ『年刊多喜二・百合子研究第一集』昭和二九年四月、河出書房）

「クラルテ運動」は、第一次世界大戦後、一九一九年（大正九年）

に、アンリ・バルビュスの小説『クラルテ』の反戦思想に共鳴した欧米の代表的思想家・芸術家たちが、第三インターナショナルの一環として結成した組織である。アナトール・フランス、ステファン・ツヴァイク、H・G・ウェルズ、G・ブランデス、ブラスコ・イバネス、ヘレン・ケイ、アプトン・シンクレア、ロマン・ロランといった人々が参加した。この運動は、その後反ファシズム・文化擁護のもとに、一九三五年六月（昭和一〇年）に、マキシム・ゴーリキー、イリヤ・エレンブルグ、アンドレ・ジイド、アンドレ・マルロオ、ルイ・アラゴン、オルガス・ハックスレイ、E・M・フォスターらが、パリ協定会館において開催した「国際作家会議」へと発展し、第二次世界大戦中は、抗独レジスタンスの文学運動として展開され、ドイツ占領下からの民族解放の文学としての役割を果たすようになったところの歴史的母体といえる先駆的運動であつた。

わが国においては、プロレタリア文学運動に受けつがれ、中国や朝鮮の民族文学に影響を与えた。その運動の挫折後（昭和九年後）においても、人民戦線運動や戦争下の文学的抵抗の支柱となって生

かされていた。『種蒔く人』の出現は、明治以来の反戦的文学の伝統（北村透谷・徳富蘆花・木下尚江など）を、全く新たな国際的展望と連帯性において展開され始めたのである。

けれども、小牧氏らが先駆者として活動を開始した大正十年頃は、その前年に「日本社会主義者同盟」が結成されるほどの運動の昂揚がみられていたが、しかし国際主義と「日本とのつながりはまだなかった」という状態であったばかりでなく、むしろ当時の「日本政府は第三インターがどだい何のことかすらも知っていなかった。」「外務省に入っても、何処へいっても、第三インターナショナルなんてものはてんでしかなかった」（小牧、前掲書）のである。

一方、当時の社会主義的思想家はどうであったかというところ、たとえば『改造』誌の大正一〇年五月号には、特集として、「第三インターナショナル批判」を展開しているが、堺利彦「日本に關係なし」、高島素之「偏見的インターナショナルリズム」、賀川豊彦「独裁主義の無能」といった表題からもうかがえるように、拒否的態度すらみられるのである。わずかに山川均が客観主義的に成立過程を紹介しているにすぎない時代であった。

このような状態の中で小牧氏は、まず第二インターから、社会主義者の多くが第一次世界大戦中に、好戦的民族主義へ変節した事実を批判し、同時に第三インターによる新たな国際主義の意義を説明することであった。「恩知らずの乞食」（土崎版創刊号）、「第三インターナショナルと議会政略」（同二号）、「戦争と愛国観念」（大正十一年一月号、『解放』）などがそれである。また『種蒔く人』には「世界欄」を設けて、革命後のソ連事情を紹介し、さらに「ロシアの小さな同志を救へ」という救済運動（責任者・平林初之輔、監

督者・秋田雨雀・有島武郎）を行っていた。以上は、主として文学運動の政治的実践的側面をみたのであるが、つぎに文学理論についてみておこう。

理論的展開として注目されるのは、社論として発表されている無署名の「芸術における国際主義と世界主義」（大正十一年一月号）という論文である。この論文は、芸術は国をもたないといわれるが、しかし実際には、いかなる個人といえども「ある特定の一族である限り、民族主義の精神及び感情がその芸術品に加わるのは、けだしやむを得ないことである。」けれども、現代はブルジョア社会であり、その社会に反抗意識をもつプロレタリアートは、国境をもたない。したがってプロレタリア芸術は、「ブルジョワの国際主義」と異って「世界主義」に立脚する芸術なのであると主張している。「即ち世界主義文学は国をもたないと共に、又ブルジョワジーの国際主義にも墮せず、そうしてなお芸術の真をつかめるところのものである。おお種蒔き社よ？」と結んでいる。

ここにちからみて、国際主義と世界主義（コスモポリチズム）との概念が全く混乱していることに気付くであろう。なぜ、国際主義を否定して世界主義を主張するような、いわば木に竹をつぐような誤りをおかしたのであろうか。その原因はいくつか考えられる。たとえば、帝国主義時代の芸術における階級性の説明が未熟であったことである。この点から民族性もまた正しくとらえられなかった。またトロツキズムの影響があげられる。この点について私は小牧近江氏に、最近問うてみたところ、氏は、在仏中に接触し文学的影響をうけた人々のなかに、トロツキイ派の人々によるところが多かったといっておられた。が、そのような事情とともに同じ号には、

「国主義と非軍国主義」の中から引用してあるのを見ると、「平和によって戦争を終結せしむるためより激しき国際的階級闘争ある」のみであるという言葉が引用してある。また再刊二号（大正一〇年一月号）には、「マキシムゴルキーのために」という巻頭言には、「僕たちは常にプロレタリアの味方であった芸術家マキシムゴルキーを称賛することをもって、僕たちの意志全部の表現とする」という強い国際連帯を表明している。これらの主張を實踐的に展開しながらその文学・芸術の理論分野にのみトロツキズムの誤った理論が持ち込まれているということがわかる。その後、芸術上の国際主義についての理論上の究明はみられなくなっている。したがって、この混乱と誤りは、プロレタリア文学理論の初期において、レーニン主義よりもさきにトロツキズムがとり入れられたことに原因がある。

けれどもこのような混乱や誤りを含みながらも、『種蒔く人』による国際主義の運動は、新たな民族観を提示しないではおられなかった。即ち自国帝国主義の打倒と、一切の被抑圧民族の解放とを結合させるという観点から、民族主義をとりあげたことであった。小牧氏は「戦争と愛国観念」のなかで、「僕たちの国に屈従するところの他の民族を解放しなければならぬ」と主張して、「ブルジョア根性のショヴィニズム」を批判していた。この論文には、こんにちからみて混乱を含むものではあるが、基本的には、国際主義と新たなプロレタリア民族主義との結合を打ち出そうとしている。ついでにつけ加えると、この論文は『解放』誌大正一一年一月号の特集「民族闘争と社会主義思潮」（註）に発表されたものである。

（註）この特集には、小牧のほかには次の論文が集められている。山

加藤、近藤栄蔵「インタアナシヨナリズム批判」、岩佐作太郎「社会主義現実と民族」、高島素之「超国家主義の迷妄」、満川亀太郎「世界革命と民族闘争」、綾川武治「民族及び民族闘争」

国際主義と民族主義との結合の問題は、その後、混乱や誤りが克服されて、理論と運動とが正しく国際的に組織されるようになって行くのは、昭和七年（一九三二年）のプロレタリア作家同盟第五回大会以後のことであろう。前年の日本プロレタリア文化連盟の創立（昭和六年十一月）において、基本方針として「植民地及び半植民地における帝国主義文化支配との闘争」をかかげた。

こんにち、民族主義と文学との関係を考える場合、例えば竹内好氏のように「プロレタリア文学の道はかならずウルトラ・ナシヨナリズムとの妥協に通ずる」（『国民文学論』東大出版会）といった独断的意見や、また和泉あき氏のように「人民解放の最も尖鋭な運動であるプロレタリア文学運動も民族の観点を正當に把握したとは言いがたい」（近代文学懇談会編『近代文学研究必携』学燈社、昭和三六年九月）といった評価がなされているが、竹内氏を別にして、和泉氏についていえば、史実の評価という点で、明治期の近代文学については再評価されているが、プロレタリア文学が民族観に新たな変化を与え、国際主義との結合においてとらえたという史実を見逃しているといえる。もちろん、これまで指摘して来たような混乱と誤りという側面からのみ検討・評価を行うとすれば、それは『種蒔く人』の頃の初期の一面についていえることであって、プロレタリア文学全体の評価については、史実を無視した評価であるといえる。全体の歴史からみるならば、『種蒔く人』は、民族観に変化を

与えたのであり、少くとも創作活動には新たな傾向が生れているのである。ここでは代表作をあげるにとどめるが、およそ次の作品系列は再評価されているのだと思う。

中西伊之助『赭土に芽ぐむもの』（大正一一年二月）、前田河広一郎『三等船客』（同年一〇月）、黒島伝治『櫓』（昭和二年九月）を始めとするシベリア物語、『武装せる市街』（昭和五年一月）小林多喜二『蟹工船』（昭和三年五月、六月）、村山知義『暴力団記』（昭和四年七月）、江間修『黒人の兄弟』（昭和三年五月）、岩藤雪夫『ガトフ・フセグダー』（昭和三年一二月）、伊藤永之介『万宝山』（昭和六年一〇月）、宮本百合子『広場』（昭和一五年一月）等々。

ナショナリズムと文学について、一般的には、社会主義文学・プロレタリア文学との関連についてつぎのようにとらえられている。

明治三〇、四〇年代の社会主義文学は中国のナショナリストの友好関係をもふくめて民族的問題への新しい関心を示し、石川啄木にもそれが見られた。しかし明治四〇年（一九〇七）に日本が独占資本の時代に入り、植民地アジアへの主要な帝国主義的侵略国家の一つとなるとともに、日本の近代文学は自己封鎖的な枠のなかでの成熟にむかい、昭和初年のプロレタリア文学運動以外には民族的関心や思考を失った。（片岡良一編、岩波小辞典『日本文学・近代』昭和三三年）

このようにみると、こんにちとちりあげられている民族問題は明治以来の近代文学における民族的関心の再評価という点に焦点があるように考えられる。私はさらに、こんにちの問題として、帝国

と考えると、このような観点からの再評価を合せて行われるべきであると考ええる。

## 二 明日の人間像

雑誌『種蒔く人』による国際主義とわが国の文学運動との関係の新たな展開は、当時の若い文学世代に深刻な影響を与えた。国際主義の思想は、単なる新知識にとどまらず、全く新たな自己の生き方の問題として影響を与えている。小林多喜二が小樽高商在学中に、同人雑誌『クラルテ』を発行したことがあげられている（成瀬正勝編『近代日本文学史』昭和三年一〇月、角川全書）。このような影響は、宮本百合子の場合においても、顕著に生涯の転換期を決定づけるものがあつた。有島武郎や芥川竜之介に象徴される大正末期の市民文学の行詰りと苦悩と深く結びつきながら、同時に自己の新たな方向を決定づけていたのである。以下、宮本百合子の場合をとりあげてみたいと思う。

大正一二年五月七日、神田駿河台の中央仏教会館で『クラルテ』（佐々木孝丸・小牧近江訳、叢文閣）の出版記念講演会が行われた。講演会には、有島武郎『唯物史観と芸術』、吉江喬松『パリであつたアソリ・バルビュスの印象』、藤森成吉『読後感』、秋田雨雀『雑感』といった人びとが演壇に立った。さらに翌日の八日に、同じ会館の楼上において『クラルテ』懇談会が行われた。発起人は『種蒔く人』同人と、秋田雨雀、藤森成吉、吉江喬松、長谷川如是閑、柴田勝衛（当時『読売新聞』学芸部長）、小川未明、千葉竜雄が加っている。

当夜の出席者は、右の人びとのほかに、新居格・堺利彦・細田民

樹・中条百合子・三津木貞子・山内義雄・相田隆太郎・小島徳弥・

「二年七年号『種蒔く人』」。参加者の一人であった宮本百合子は、その夜の印象がいかに強かったかということを次のように記している。

「予期通り、三土会などとは、まるで空気が違う。あゝ云う才人の集り、惻口な者でない人間は俺たちの仲間には非ず、と云ったような全体の調子は比処ではなく、何処か雑駁なうちに、暖い気取らない心持が通っている。家庭に不満な者、その他、心に苦しみを抱いている男女が、社会主義者の群に投ずるのは無理もない。同じ文学者でも、斯う云う集りに出た時と、当代一流の作家——而も若年の——達の中に入った時と自由さに於て違ふらしい。

自分が一つの主義に捕われることさへ恐れなければ、私は悦んで彼等の集りの度々に出席するだろう。」

これは、彼女の死後に発見された日記に記されているものである。この日記は「『伸子』時代の日記」と題されて発表（年刊『多喜二・百合子研究』第一集、昭和二九年四月、河出書房）されたもので、大正一二年四月二八日から五月二三日までに書かれた、原稿用紙百枚にわたる詳細な生活記録である。翌大正一三年に『伸子』が書かれる。この日記は荒木滋との結婚生活の破局と、文学上の苦悩とがからみあって、強烈な感銘を与える。

「クラルテ」懇談会の印象はさらにつづいて書かれている。日付は九日の執筆であるから、懇談会が行われた翌日にかかれたことになる。それは次のように刻印されている。

小牧近江氏。

フランスに電報を打ち、クラルテの仲間には、決してアンリー・バル

ビュスの想像するように十人ぼっちの者ではないし、比処に集ったアンティ・ミリタリストは今後も団結して仕事に当り、今夕、万堂一致で、再びルール占領に反対の意を表する、と言って遣うと發議する。皆、盛に賛成！ 賛成！ と叫ぶ。

中にあり、自分は反省に打れ、嚴肅な淋しい心持がした。遠いヨーロッパのライン河畔に起ったことに對して、若い、決して偽りのない青年社会主義者達は、正義を叫び、人道を強調する。然し、一朝事が目前に迫り、前田髪一郎が熱を以て説いたように、近い将来に於て、日米が衝突でもすることが起つたら、彼等は、どんな態度を以て、アンティ・ミリタリストとしての主義を体顯するだろう。

平和な時、自己がその戦闘の圏外に在る時、正義や公正を説くのは、馬鹿も出来る事と思う。所謂國家は戦争を声明し、一般の人心が敵害心に燃え立って、理窟が自分達の立場をジャスティファイする為にばかり歪められるような場合、果して幾人が、精神の公平さを失わず、戦をのせて流れる人類の運命の全延長を直視して居られるだろう。

自己の裡に、多分の曖昧さ、便宜主義の種があるのを知って居る自分は、一生のどこかに、大きな大きな地獄の門が口を開いて自分を待つて居るように感じる。足許まで焰の迫ったその門を、自分は傷も負わず通り抜け得るか。

恐れて足がすくみ、倒れて焼け死ぬか。

そういう切迫した時、今まで漠然たる連鎖で、コムラードがあつた者は、麦の穂をしごくように淘汰されて仕舞うに違いない。

大事に処する決心と言うものは、古典的なものだ。決心は瞬間に

懸るが、その瞬間に懸るのは個人の全生命である。

これほど明確な予言性をもって、自己の生涯と運命とを語ったものは、まれであろう。『貧しき人々の群』から出発し、アメリカでの生活、『伸子』、ソ連邦での生活、プロレタリア文学運動、戦争下の抵抗、そして戦後の活動、『道標』へと続く生涯にわたってながめるとき、彼女の言葉に従えば、古典的な厳肅さを、『種蒔く人』の運動が与えたということになるだろう。別な言葉でいえば、彼女の生涯の生き方の方向を決めた瞬間である。ここに『種蒔く人』の与えた影響のもっとも高い典型が刻まれている。思想と文学としての国際主義とはいかなるものであるかを語ろうとするとき、彼女はまず生き方の問題としてとらえているのである。

この問題は民族主義の場合においてもいえることである。たとえば、平林一氏は最近の『日本文学』（昭和三六年一〇月号）の時評欄で、「ナシヨナリズムの問題——『思想』特集号を中心」をかいいて冒頭で次のように、知識人の生き方の問題としてとりあげている。

「昭和の文学・思想において『民族』の問題が先ずクローズアップしてきたのは昭和一〇年前後のことであった。戦前昭和期において、『いかに生きべきか』という知識人にとっての根本的な問いが最も痛切に発せられたのもこの頃であり、否応なしに日本の知識人は、その社会の現実と風土に面接し、自己確立の課題の重さにあえいだのであった。」

平林氏のいうナシヨナリズムは一般的なもの、いわゆるブルジョア民族主義を意味しているが、当時の知識人の「自己確立」の課題としてとらえている点に注目される。侵略戦争への武装として強

制されたナシヨナリズムが、軍国主義者の旗じるしであったのにもかかわらず、そのことを見抜いていたはずの知識人が、なぜあえぎながらも「自己確立」の課題となりえたのであろうか。これは興味深い問題意識といえる。けれども、当時の宮本百合子は、国際主義との結合において、自己の民族性を主張していたのである。ここに根本的な相異点がある。当時の多くのプロレタリア文学者たちは、あえぎながら転向をよぎなくされた。彼らは国際主義の立場を放棄することによって、はじめてナシヨナリズムの問題が自己の生き方の課題となりえた。したがって転向は、ウルトラ・ナシヨナリズムに通じたのである。プロレタリア文学そのものが通じたのではなくて、それを放棄することによって、転向は成立したのである。それでは宮本百合子は、ナシヨナリズムをどのようにとらえたであろうか。

昭和八年一〇月一七日から四回にわたって『読売新聞』に「プロレタリア文学における国際的主題について」という批評を発表している。当時のブルジョア文学にあらわれた「国際的らしい主題」の中に含まれている異国趣味やエロ・グロ風景とブルジョア民族主義の本質とが結びついている点を批判しながら、次のように主張している。

ところで、ではプロレタリア文学は国際的展望において民族性の問題をどう取扱っているだろう。

決して、それをブルジョア文学におけるように最後の決定的なものとしては認めない。階級的インターナシヨナルの闘争を強固にし、その連帯的活動を活々させ、より効果的に行うための、具体的情勢の個別的條件としてだけ、民族性は問題となってくる。

どんな場合でも中国は中国、日本は日本ではない。中国はこうで、日本はこうで、それぞれの特殊性は、互に国際的階級闘争の全場面に對してどういう役割を持つものか。そういう観点からとりあげられて来るのだ。

だから、各国の階級闘争が国際的連帯を緊密にするにつれて、文化活動の国際性もこの頃はますます拡大されて来た。

このような原則的とらえ方に立って、さらに具体的に深められて行く。明治期以来の文学にあらわれた生活感情や自我の姿をとおして、民衆の中の民族形成を論じた「文学における今日の日本的なもの」(昭和一二年三月号『文芸春秋』)、民族性を歴史の変化にとらえないで、古典の規範にしばりつけて考えるあやまりを批判した「音楽の民族性と諷刺」(昭和一五年)、生活的眞実から浮上った民族主義を批判した「文学は常に具体的——『国民文学』にのぞむ」(昭和一六年四月二四日『報知新聞』)などがそれである。これらの評論は、国際主義の観点から民族性をとらえ、民族の歴史に照らして、さまざまなブルジョア民族主義による文学への強制とたたかい、そしてそこから新たな民族文化の伝統をとらえ、発展させようとした積極的評論である。

このような戦争下の宮本百合子の態度は、評論の場合においてのみあらわれていたのではない。作家としての芸術的創造において結晶させようとして試みていたのである。昭和一五年の『広場』や戦後の大作『道標』などの諸作品は、自伝的要素を素材とし、生涯を決定づけたところの思想的発展体系を世界と日本の民衆の運命のなかに構成し、しかも現代の主題として描き出している。ここでは戦争下の抵抗文学のすぐれた業績である『広場』についてみておこう。

この作品の女主人公朝子は、友達の素子とともにモスクワ留学しているうちに、そのままそこに留まって活動することを許される。それは素子をひがませるほどに光栄なことであった。だが、その国の若者たちが喜びの歌を合唱している興奮にまきこまれていううちに、朝子は日本の民衆のたたかいを描かねばならぬ作家としての自覚を深める。しかし具体的に裏づけることが出来ない立場を感ずる。そう考える彼女は、結局「人類の歴史の善意につながれながら、全く独自の相貌をもっている日本の、そのユニークな歌を描きたいと思う。そのために、朝子はどうしなければならぬだろうか。」と考え抜き、自己の道を帰国へと決意させた。このような朝子の姿の中にわれわれは、国際主義と民族主義との新たな統一・結合を目指した姿としてとらえることが出来るだろう。

すでに故片岡良一教授は、晩年の著作『近代日本文学教室』(昭和三二年、旺文社)の中で、「より高く豊かな明日の国民的成熟」の人間像として朝子の姿を位置づけておられる。片岡教授は近代日本文学に描かれたさまざまな知識人の人間像を示しながら、いわば教授の一つの結論ともいえる「明日の人間像」を朝子の姿に期待されていた。横光利一『紋章』『旅愁』などが、「西欧的な科学と合理主義(近代)より合理主義など越えた東洋の直観(伝統)の方が尊い」とする当時の知識人の生き方や、また『冬の蠅』『のんきな患者』の梶井基次郎、『橋本屋』『本日休診』の井伏鱒二らの「庶民への接近」の中に知識人の生き方を求める方向などと比較しながら、止揚されるべき道として、それらとは「別に石川啄木や有島武郎から中野重治などにかけて、もっと積極的な新しい戦いの道に立ち上がっている人々のすがた」を緊密化した作家として宮本百合子



『広場』の朝子の場合をあげておられるのは、まったく正しい評価であったと考えられる。

### 三 今日の問題点

戦後期の最大の文学論争を展開した国民文学論争以来、その論争の核心的問題であった民族文学の問題は、依然として今日の課題である。現在、アジア・アフリカ作家会議の中でも日本文学は先進的な役割を果たしている。このような国際主義との結びつきの発展によって、民族文学はとらえなければならぬだろう。このことは、『種蒔く人』から宮本百合子の場合においてのべて来たところである。けれども、一般的にいつて、両者を結びつけてとらえられているとはいえないのが現状ではなからうか。プロレタリア文学との関連においても、その史実すらまだ評価されていないといっている。したがって、両者の結合に対して一面的なとらえ方に落入する場合も少なくない。たとえば、花田清輝氏の「現代史の時代区分」（昭和三五年九月『中央公論』）という評論には、かつて『種蒔く人』においておかした誤りを再びくりかえしている、という傾向がみられる。

花田氏の評論は次のような意図によってかかれていた。「わたしは、一九六〇年の安保反対闘争を、断じて一九一八年の米騒動のようなものではないが——しかし、それが、ほとんどナショナリズムの立場からなされているという点に——したがって、それと中国革命との関連が明瞭にとらえられていないことに、わたしなりの不満を感じた」という点からである。この限りにおいて、花田氏の不満は、国際主義を無視した民族主義に対して警世的意図があったと

場というものはどのようなものであろうか。

花田氏は、自己の立場を主張するのに、宮本百合子『道標』と、それに続いてかかれるはづであった『春のある冬』『十二年』など三部作の構想が、一九二七年に始って、一九四五年に終っている時代区分の仕方に対して、「案外、作者としてのかの女の限界のようなの」が示されているかもしれないのだ」と指摘し、その時代区分は、革命中心（インターナショナル）の見方から、戦争中心（ナショナル）の見方に移行する区分の仕方であると批評している。「つまり一言にしていえば、わたしは、一九二七年の——すなわち、十年たったあとのロシア革命との対決からはじまっているその三部作を、一九四九年の中国革命によってではなく、一九四五年の日本の敗戦によっておわらせようとしたところ、すこぶる竜頭蛇尾的なものを感じないわけにはいかないのである。」といっている。さらにつづけて、次のように放言さえている。「世界史の動向を決定したロシア革命や中国革命に比較すれば、そもそも日本の敗戦などとなるにたりない、些事にすぎないではないか。」（傍点・小林）と。

この放言は、花田氏の逆説にしたがえば、『道標』のインターナショナルなスケールの大きさに対して、作者のものの見方がナショナルな、いかに小さいものであるかということを行っているのである。つまり、革命中心の見方の大きさに対して戦争中心の見方は「一些事」ではないか、というのである。「ナショナルな観点からインターナショナルなものをとらえようとする女主人公が、今日われわれの眼に、いくらか矮小にみえるのは仕方のないことなのである。」ともいっている。ここで、私は『道標』論を予定していないので、もっぱら花田氏の批評方法と観点との関係を明らかにしてお

まず、文学作品を批評する際に、花田氏のように時代区分の仕方から、作者の限界を批評するという方法は、まったく機械的であるという点である。この点は、すでにレーニンが「他人の旗じるしのもとに」(一九一七年)(註)において、当時の「自称国際主義者」カウツキー、ア・ポトレソフ、トロツキイらをあげて、日和見主義者の常套手段であるときびしく批判したところである。レーニンは時代区分の限界について次のように指摘している。

「もちろん、限界は、このばあい、自然および社会におけるすべての限界一般と同じように、条件的であり、可能的・相対的であって、絶対的ではない。しかも、われわれは、とくにぬきんでた、めだつた歴史的諸条件を、ただ大づかみに、大きな歴史的諸運動の道標としてとりあげるのである。」

このことは、文学作品における時代区分についてもいえることである。宮本百合子の『道標』とそれにつづく予定だった三部作の時代区分が「二七年テーゼ」の一九二七年に始まり、一九四五年の日本の敗戦に至って終る予定だったことをとらえて、この区分が「インターナショナル」な見方から「ナショナル」な見方に「移行」していると規定し、そこに作者の限界があるとするのは、まことに機械的批評であるといわねばならない。作者の思想的・人間的限界を、作品の時代区分から規定されてはたまったものではない。

まったく不思議な一致であるが、花田氏の現代史の規定と瓜二つの規定を、レーニンが「他人の旗じるしのもとに」で批判している。レーニンは、カウツキー、ア・ポトレソフ、トロツキイら「自称国際主義者」たちが、現代史の区分を「民族的狭量から国際精神

へ移行しつつある点に旧時代と新時代の根本の区別がある」と規定して、それぞれの時代における民族運動の特質や階級的性格を誤ってとらえ、インターナショナルをとらえたが、そのような歴史の「性格づけの欠陥」をもつた国際主義は、かえってブルジョア民族主義に通じており、理論的・実践的にも修正主義・日和見主義者にすぎないことを精彩に論じている。私は、花田氏の批評を読みながら、日本帝国主義の敗戦が、世界史上の「一些事」としてしか見られないという「インターナショナル」な観点というものが、まったくのハタリにすぎないことに驚ろかざるをえない。

以上にのべたことをまともてみると、わが国の現代文学史において、『種蒔く人』によって始められた国際主義に立つ文学運動は、その初期において文学における民族主義を誤ってとらえ、そのために、世界主義と混同して理論化するという誤りを伴ったのであるが、しかしながら実践的には反戦文学・反植民地文学の創造的展開を行い、文学者、知識人の思想と生活に根本的影響・変化を与えてこんにちに至っているということが出来る。この展開過程は、まさにじくじくの過程であるが、とくに戦後期においては、歴史的條件に根本的变化をもたらしている。したがって、こんにちの民族主義をとらえる場合、『種蒔く人』のころとの条件の変化をとらえなければならぬこの変化の上に立って国際主義との結合の問題は、歴史的連続過程として評価されなければならぬであらう。

(註) 国民文庫版レーニン『社会主義と戦争』(川内唯彦・川上洸訳、昭和二八年)に収録されている論文による。